28年後の真実 1980 2008

幻のモスクワから北京へ―

第４部

危惧（きぐ）⑤

北京の空 はばたけ

「過」　山下　泰裕

最後は『世界のヤマシタ』である。モスクワ五輪不参加が決まったとき、たしか柔道の山下泰裕は無力感に包まれていた。

あれから28年。神奈川県平塚市の東海大学武道館。〝史上最強の柔道家〟が青畳にでんと座る。

モスクワ五輪ボイコットを漢字一文字で表せば、と聞くと、50歳の山下はぴしゃりと言い放った。

「終わったことです。過去の『過』です」

同世代の共感がそうさせたのか。しつこく聞き返してしまった。「単なる過去ではないのでは」と。

「過去を振り返るのは好きじゃない。過ぎたこと、でいいでしょ」

すなわち山下は今を全力で生きる。嫌な記憶は薄め、前向きに。

「時々、モスクワのことを聞かれると、〝それは自分の一番大事な肉親が死んだことを取材されるようなものです〟と答えます。それで、私のショックがどのくらいか、ご理解いただけるでしょ」

不運が重なる。モスクワ五輪ボイコット決定の翌日、山下は大会に出場し、『カニバサミ』の奇襲で左足を骨折した。

その1カ月半後。東海大学大学院に通っていた山下は、時の東海大学総長の松前重義から提案を受ける。「モスクワ五輪を見にいかないか」と。

山下は戸惑った。だが周囲の勧めもあり、モスクワに向かった。

「不安でした。会場に入れば、ほんとうはおれが試合をしたはずなのになあ、と思うのではないか。つらい、悲しい、悔しい、無念の気持ちがわいてくるのじゃないかと…」

現実はちがった。柔道場の風景がよみがえる。右手を大きく振りながら、懐かしそうに思い出す。

「外国の選手たちが、〝おーい、ヤマシター〟って手を振るんです。みんながわたしを励ましてくれました。〝来てよかったな〟と思ったのです」

その瞬間、陳腐な表現を借りれば、五輪ボイコットの呪縛（じゅばく）から解かれたということか。

「あっ」と思い出す。「ひとつだけ」と言って、畳を右手でとんとたたいた。「後悔していることがあるんです」と笑う。「いまは後悔していません。あのときは後悔したんです。畳に一回、上っていればよかったなあ、と」

念ずれば、花ひらく。84年ロサンゼルス五輪で再び、日本代表となった。もう『涙の金メダル』は語り草だ。

引退後、国際経験を積み、指導者として、日本のリーダーとして世界にはばたく。多様な価値観に触れ、視野が広がる。

「だから、若い人たちにはもっと世界に目を向けてほしい」

昨年、山下は国際柔道連盟の理事選で敗れた。ただ地位に未練はない。「日本の顔」としての働き場所はそこだけではない、との信念があるからだ。

特定非営利活動法人（NPO法人）の『柔道教育ソリダリティー』も立ち上げ、国際交流に尽力する。北京五輪に参加する中国男子の柔道代表チームも支援した。

さて北京五輪は。

「選手たちには悔いのない戦いをしてほしいですね。思いっきり自分の夢に挑戦してほしい」

言葉が熱を帯びる。

「個人として出るのじゃなく、日本代表として、出るのです。その気持ちだけは胸に秘めて、北京の空に存分にはばたくことを期待しています」

平和、友情…。たしかにモスクワ五輪はもう遠い過去の話である。でも、どこかで北京の空へ結ばれている。

＝敬称略、終わり

（松瀬学＝ノンフィクション作家）

「選手には悔いのない戦いをしてほしい」と話す山下＝神奈川県内で